ものづくりへの思いにふれる旅①

手縫い革工房 oharido（オハリド）

植村慶子さん

Keiko Uemura

私は同じデザインのバッグを何度も作ります。
しかし「またこれを作るのか」と思うことはありません。
今度はもっと上手にできる、上手になりたい、
心からそう思います。
この仕事をするようになってから芽生えた気持ちです。

触れた瞬間、手に馴染(なじ)む革は、心をほぐしてくれる。植村慶子(うえむらけいこ)さんが作る財布やバッグは、まさにそれだ。築百三十年の古民家に並べられた商品は、そのどれもが味わい深い。

小さい頃から裁縫が好きだったという彼女は、その理由をこう教えてくれた。「実家が呉服屋だったので、帯を織る方をはじめ、職人さんの手仕事を見る機会に恵まれていました。だから、ものを作ることにはずっと興味がありました」。

東京の大学を卒業後、海外での生活を経て、佐世保の町に戻ってきたのは二十六歳の時。介護福祉士として働きながら、時間を見つけては針仕事を楽しんだ。そんな時に出会ったのが革細工だったという。独学で勉強を始め、気付いた時にはのめり込んでいた。

「介護の仕事も一生懸命やっていたんですが、『二十四時間、ものづくりがしたい』っていう気持ちがあふれちゃって」と、植村さんは笑う。

大切にしているのは、革の質感。植物タンニンで伝統的な技術によりなめされた牛ヌメ革は、使い込むほどに風合いが出るという。また全ての工程を手作業で行うため、制作には時間がかかる。しかし手縫いのステッチは温かみがあり、なにより作り手の思いが伝わる。

九年前に店舗兼住宅を構えたのは、すぐそばに海と山を感じられる船越(ふなこし)町。趣味のシーカヤックを通じて知り合い、結婚した夫の祐次(ゆうじ)さんは、佐世保が気に入って大阪から移住してきたという。風に揺れる草の音や鳥の声が耳に心地よいこの地は、植村さんにとってかけがえのない場所だ。「ここでの穏やかな暮らしが、心を落ち着かせてくれます。日々の小さなことに惑わされずに、ものづくりに集中できるのは、幸せですね」。その柔らかな笑顔は、裁縫好きの少女そのものだった。

「このヌメ革には、
手縫いのステッチが似合うんです」
と植村さん。

購入者の半数以上が革から選ぶオーダーメイドを注文するという。
出来上がりまでの時間は約3カ月。
待つ時間も楽しみだ。